

# 荻生徂徠の訓点資料における左ルビについての考察

## — 『南齊書』 『梁書』 を中心に —

王 侃良 (名古屋大学大学院博士後期課程)

### 要旨

本稿では、荻生徂徠の訓点資料（「徂徠点」）を取り上げ、『南齊書』『梁書』を中心として、漢字語の左側にある振りがな、すなわち左ルビをめぐって考察を行った。まず、一字漢語の場合、「徂徠点」における左ルビは音読みと訓読みの両方を示すために活用されていた。二字以上の漢語の場合では、左ルビが主に「訓訳」のようになっているが、『六論衍義』での試行錯誤をした訳し方と違い、多く古注によつてきたという傾向がある。このような考察結果によつて、古文辞学を提出したという時期以前、徂徠の訓読観には、一方的に新注によつたもののみならず、古注からの影響も存在したことがわかった。また、『南齊書』『梁書』にある「徂徠点」の左ルビは、ひたすらに俗語を左側で訳すのではなく、場合によつて訓をつけない、あるいは漢籍の注釈を参照したりすることもあった。徂徠が『南齊書』『梁書』における一部の漢語は俗語であることを意識しても、すでに非俗語として受容された隋代以前の俗語はそのままにしている。『南齊書』『梁書』における左ルビの使い方も、徂徠が『六論衍義』において自身の俗語の知識に任せて訳すという「訓訳」と異なっている。つまり、『南齊書』『梁書』における左ルビは、「訓訳」と同一視することはできないと思われた。

### 一、はじめに

明治初期の新聞や小説などに見られる左ルビについて、村上（二〇一七）は、江戸時代の読本に溯り、中国（白話）小説の訓読、つまり「訓訳」に由来すると指摘している。「訓訳」とは、（漢文）訓読と同じかたちであるが、漢字の右側に訓読体、左側に俗語を記して解説を加えるものである。左側の訳のみを指して「訓訳」という場合もある。「訓訳」という用語は、江戸時代においてはすでに存在したが、村上（二〇一七）の指摘によれば、新たな分析概念として提出したのは中村幸彦である<sup>1)</sup>。中村（一九六八）は、「訓訳」について次のように述べている<sup>2)</sup>。

訓訳 訓読と同じ形式であるけれども、必要な語の左側に、俗語の注を加えたものを（訓訳）という。（例略）

俗語でなくても、訓を左側に書く形式は、早くからあつて、文漢読になるものなどに著しい。元禄4年刊の『遊仙窟』なども、その名残りを留め、『三重韻』も音訓を右左に示してある。しかし訓訳本が問題となるのは、中国俗語の輸入であつて、岡島冠山や僧大通のような長崎の唐通事や帰化人の家から出た禅僧、又は渡来の僧俗によつて、当時の中国語や白話文学が中央の学界に紹介された頃からである。宝永2年刊の『寛後禪』（倭翠楼主人訳）がこの形式を用いた初め

<sup>1)</sup> 村上（二〇一七）、九二頁を参照。

<sup>2)</sup> 村上（二〇一七）、九二頁。また、江戸時代に於いても、「訓訳」するものと違い、漢字の左右に片かなまたは平がな振りがなが付いているものがある。つまり漢文の詳しい読みかたを知る資料として知られる仮名付の訓点本である（左右ともに訓読語を使用）。これについての紹介は齋藤（二〇一七）、二五―二六頁に詳しい。

<sup>3)</sup> 中村（一九六八）、二七四頁。

の白話小説であった。その後『小説精言』（寛保3、岡白駒訳）・『小説奇言』（宝暦8、沢田一斎訳）の類が、中国白話小説を訳出するのに皆この形式を用いた。岡島冠山の李卓吾百回本によつた『忠義水滸伝』（享保13、宝暦9）が、訓読にのみよつたのが珍しい程である。『嘲笑府』（安永5）・『訳解笑林広記』（文政12）など笑話の訳もこれである。後には白話のみでない。柏木如亭の創意になつて、後人の補つた『訳本芥子園画伝』（文政2）も、訓訳の方法で、流石に詩人だけに、巧みな訓である。（例略）

つまり、「訓訳」を論じる場合、解説の部分で採用される日本語の訳語も、訳す対象としての中国語も、一般的に知られる訓読語（日本語）や文言文（中国語）に限らない。漢籍の輸入などに伴い、儒化人や唐通事を含む日本の知識人たちが、わかりやすい言葉で同時代の中国語の俗語を訳したことが、「訓訳」の特徴として注目されている。

ところで、訓訳の起源については、中村（一九六八）が白話小説や唐話辞書類などに言及している一方、村上（二〇一七）は次のように、その原点を荻生徂徠（一六六六―一七二八）の思想（訳文の学）にあることを指摘している<sup>四</sup>。

徂徠は、理想的な第一等法の法、現実的な第二等法で訳する場合は、日本の俚言でという。訓読を用いる第二等法では、語を選んで、俚言で解説すると述べる。この訓読を用いる第二等法は、俚言で注解を加えるということになる。

そして、村上（二〇一七）はこのような徂徠の考え方が具現化されたものとして、徂徠の辞書類の代表作である正徳五（一七一五）年刊『訳文筌蹄初編』にある例を挙げている<sup>五</sup>。

好（中略）俗語ニ好<sup>好</sup>歹ト連用ス。

歹 俗語ニ好歹ト反对シテ用ユ。好<sup>好</sup>東<sup>東</sup>西<sup>西</sup>歹<sup>歹</sup>東<sup>東</sup>西<sup>西</sup>ナドナリ

村上（二〇一七）は、右の二例（「ヨシアシ」、「ヨキモノ」等）のような、漢字語の左側に、訳語（徂徠の場合では俚言に相当するもの）で解説するかたちを、「訓訳形式と同じもの」<sup>六</sup>、あるいは「後の白話小説に加えられた訓訳の姿を彷彿させることになる」<sup>七</sup>ものと述べている<sup>八</sup>。つまり「訓訳」という形式が白話小説などに広く用いられる前に、徂徠学において、その啓蒙的なものがすでに存在した。そして、「徂徠学が上方に移り、冠山の上京によつて、上方で唐語学が一層盛んになり、白話小説の和刻本が出版されるのである。白話小説の普及のため上方で応用されたのが訓訳であった。（中略）徂徠学が上方の唐語学と結びつき訓訳が産まれたのである」と述べている<sup>九</sup>。

<sup>四</sup> 村上（二〇一七）、九六頁。

<sup>五</sup> 前掲論文、九六頁。

<sup>六</sup> 前掲論文、九六頁。

<sup>七</sup> 前掲論文、九七頁。

<sup>八</sup> 前掲論文、九九頁。また、徂徠学の影響と「訓訳」との関係、また最初に「訓訳」が使われた白話小説などの論述については、村上（二〇一五）、村上（二〇一七）を参照。

このような訓読に近似するもの（言い換えれば訓読の亜種であるもの）は、徂徠の訓読資料には見られるのだろうか。漢文直読を主張し、訓読を否定したとして知られている徂徠の著書は、一般的にほぼ無訓であると考えられているが、実際には訓点を付したものが残されている。例えば徂徠が加点了した、享保六（一七二二）年に刊行された『六論衍義』においては、

那一箇不<sub>レ</sub>是父母生<sub>レ</sub>成的<sub>ナラ</sub>

（孝・一表）

這個在<sub>レ</sub>枕邊<sub>ニ</sub>說<sub>キ</sub>公婆<sub>的</sub>是非<sub>ナラ</sub>

（孝・二裏）

というように、「那一箇」、「這個」の左側に「イツレヒトリカ」、「コレハ」と訓じる用例が見られる。中村（二〇〇八）では、このようなものと、前述の徂徠の「訳文の学」との関係を、次のように論じている<sup>9</sup>。

その中（『六論衍義』…執筆者注）で、徂徠の訓点の独自性を特徴づけるのは、左訓（通常の語の左側に付した訓点とは別に、字の左側に付された「訓み」）の多用である。（中略）これは、『訳文箋註』『題言』にも述べる、「俚語」を以て「訳」という彼の姿勢の反映であろう。徂徠は、文章右側の見慣れた「訓点」に加えて、左側に「俚語訳」を付することで、「異質な文化」のいわば多層的な解釈をここで提示しているのだと言える。

つまり、「訓訳」的なもの（中村（二〇〇八）でいう「左訓」）は、徂徠の訓読資料にも存在する。さらに、これが徂徠の訓点における特徴とも言え、またそのルーツも徂徠の訳文の学（訳学）にあるという、三つのことが中村（二〇〇八）の指摘によってわかっている。したがって、「訓訳」と徂徠学の関連性を探求するため、徂徠の漢語文典にある論述や、漢字語に対する解説のほか、彼の訓点資料も取り扱う必要があると思われる。中村（二〇〇八）は『六論衍義』のみを検討したが、『六論衍義』が刊行される約十五年前の宝永三（一七〇六）年の頃、柳沢藩の『二十一史』の出版企画に参加した徂徠は、すでに『南齊書』、『梁書』などのような、いくつかの漢籍の史書の加点了をやり遂げていた。

徂徠はこの加点了作業を経て、「日本人の漢文理解が、「俚言」に強い反面俗語に弱い」ということを意識した<sup>10</sup>。例えば『南齊書』などの史書の中で、「不耐煩」、「東西」、「笨」などの漢字語が、実は俗語であると徂徠が指摘している<sup>11</sup>。これらの「俗語」に対して徂徠は、どのような施点策を取ったのか、また、先行研究が指摘しているように、漢字の左側に「訓訳」という形でルビを振っているのかというような問題について、まだ検討する余地があると思う。従って、本稿では、前述の『六論衍義』のほか、『南齊書』と『梁書』を中心とする漢籍を取り上げ、先行研究で検討されている「訓

<sup>9</sup> 中村（二〇〇八）、四二頁。

<sup>10</sup> 平石（一九八四）、六一頁。

<sup>11</sup> 原文は「簡者字較二十一史。六朝以薄。言之涉俚常若何限。若宋史不耐煩。齊書東西。梁書樓羅。透水。南史北史。笨。子細。功夫」である。澤井ほか訳注（二〇一六）、五二頁を参照。

訳」の起源を端緒として、荻生徂徠の訓点資料における左ルビをめぐって考察を行う。

## 二、本稿の調査範囲

前節でも少し触れたように、徂徠の著書はほぼ無訓であると考えられているが、実際にはいくつかの訓点を付したものが残されている。このような訓点資料を対象とした研究は、管見の限りでは多くはないが、「徂徠点」という用語を使った先行研究があることは確認できる。その中で「徂徠点」の定義は大きく二種類に分けられている。一つは石崎（一九六七）、李（二〇〇六）などが、『六論衍義』の徂徠加点本のみを「徂徠点」としたものである<sup>±</sup>。もう一つは村上（一九八〇）が、徂徠の名のもとに刊行された『六論衍義』をはじめ、『南齊書』や、『射学正宗』のような漢籍の訓点作業をすべて「徂徠点」<sup>±</sup>としているものである<sup>±</sup>。

本稿では、村上（一九八〇）の定義に従い、徂徠の名のもとに刊行されたもの、そして成稿した者としても徂徠の名を載せているものを徂徠の訓点資料とし、また「徂徠点」と呼ぶことにする。そして、前述のように、本稿は『南齊書』と『梁書』を中心として考察を行うが、この二つの和刻本について長沢（一九七四）は次のように紹介している<sup>±</sup>。

この出版は、川越（後、大和郡山）藩主柳沢吉保が計画した二十一史翻刻事業中の一で、（中略）元禄十四年に晋書から始め、ついで本書（南齊書：執筆者注）を、さらに宋・梁・陳の三書を出版（下略）。

また、平石（一九八四）においては、

（前略）宝永三年にかけて柳沢藩蔵版として五史を刊行。志村楨幹と分担して校注訓点の任につく。

と述べられているように、『梁書』『宋書』『晋書』『南齊書』『陳書』の五書は、柳沢藩の漢籍史書翻刻企画における史書である。この五史における訓点作業は徂徠一人のみではなく、志村楨幹（生没年不詳）と分担して完成されたものである。その内、『梁書』の紀一と『南齊書』の序と同様に「日東荻生宗右衛門茂卿句読」と記されており、両本の巻末にも「荻生茂卿譚識」と見える。これに対して、『宋書』『晋書』『陳書』の三書の序には徂徠の名ではなく、「日東志村三左衛門楨幹句読」と明記してある。従って、この五史の中で徂徠が施点したのは『南齊書』、『梁書』という二書であることが確認できる。なお、右述の二書にある「左訓」の特徴を確認するため、本稿では『六論衍義』も参考資料として取り扱うことにした。

± 石崎（一九六七）、一三四―一三六頁、李（二〇〇六）、七〇頁。また中田（一九七九）は、「この人（徂徠：執筆者注）の著書はみな無訓で、論語徴などもそれである。ただしその六論衍義（享保六年成）の訓をみるに、できるかぎり字音語でよみ、補註を省略し、捨仮名もまた少ない」（一六九頁）と述べているように、「徂徠点」とは呼んでいないが、『六論衍義』を徂徠の訓点資料として認めているようである。

± なお、「徂徠点」という呼称は、江戸時代に於いて、一般的に知られている林羅山の「還華点」や、佐藤一斎の「一着点」などの訓読法（訓点）とは違い、当時にはこの呼称が存在しなかったようだという点には留意する必要がある。

± 村上（一九八〇）、二八九―三四二頁を参照。

± 長沢（一九七四）、「和刻本南齊書解題」を参照。



その内、『南齊書』『梁書』における左ルビは一字漢語の場合に多く見られ、二十七例がある。そして『南齊書』『梁書』における一字漢語の左ルビは、本稿の一節で挙げた『六論衍義』に見られる用例と違い、「訓訳」のように訳を示すことや、訓読みを提示することほか、音読みを示すために付けられていることが注目される。

一方、二字漢語の用例数は四例がある。二字漢語の場合は、音読みを示す用例がないが、「訓訳」のようになっている。ただし、『六論衍義』と違い、『南齊書』『梁書』の場合では、漢字語が俗語とされても、その漢字語において左ルビが振られていない、また無訓であるものも見られる。

以下、用例を挙げながら、説明する。

### 一字漢語における左ルビ

まず、左ルビが漢字の音読みを示す場合は四例ある。次の「例四」「例五」のように、右側には振りがなによって漢字の一般的な読み方、あるいは音合符を用いて音読みを提示しているのに対し、左側には本書で限定される読み方を示している。

「例四」<sup>ト</sup>鯛陽チウ

『南齊書』志卷六・八表

「例五」秦チ屠チ越チ海チ

『南齊書』列伝二十八・六表

「例四」は、漢字「鯛」の右側に「トウ」、左側に「チウ」という、二種類の読み方を示している。「例五」の漢字「屠」では、「例六」と違い、「左訓」のみ見られるが、「秦」「屠」という漢字の右側に音合符があるため、やはり二種類の読み方を提示しているのではないかと考える。

『広韻』によれば、うなぎ、または鯉のような魚の名を指す時に「鯛」の発音が「トウ」（徒紅切）となるが、地（県）名である「鯛陽」では、「チユウ」（除柳切）と読む。また、「秦」「屠」という古代中国の北方にあった異民族を論じる場合、例えば、「休屠」という匈奴の王の称号を称する際、「屠」の読み方は「ト」（同都切）ではなく、「直魚切」の「チヨ」としている。ここでの「徂徠点」は、右述の説を忠実に「左訓」という形で反映していることが窺われる。このような用例は『南齊書』『梁書』との史書類にのみ存在し、『六論衍義』には見られない。

続けて「左訓」が漢字の訓読みを示す場合は、以下の「例六」のように、右側に音合符、または送りがなによって音読みを提示し、左側に訓み方を示している。また、「例七」のように、左ルビのみで訓読みを示す場合もある。

「例六」地黃村ノ潘チ屠チ書チ禁チ

『南齊書』列伝七・十三表

「例七」貫チ中チ下チ上チ竟チ黒チ

『南齊書』志卷四・十表

〔例六〕の「禁」は、通常の「とどめる」、「忌みきらう」という使い方ではなく、「祝禁」(尤好數術・卜筮・祝禁・鑿金・琢玉、並究其妙『陳書・長沙王叔堅傳』)という、「のろい」、「まじない」の意味で使われている。「徂徠点」ではそれぞれに左ルビ(「マシナウ」)を用いて対応している。

〔例六〕を始めとして、(俗語訳であるかを問わず)『南齊書』『梁書』における左ルビが訓読みを示す場合は、音読みの場合と同様に、その場面で限定される訓み方・意味を提示するという傾向があると考えられる。また、以下の〔例八〕のように、左ルビによつて、ある場面で限定される漢字の使い方を示す場合もある。

〔例八〕臂上有「封疾」志

『南齊書』列伝三十八・六裏

〔例八〕の「志」は左側に「ホクロ」と訓んでいる。『康熙字典』や『説文解字』などの字書においても「志」に対して「瘰」の「あざ、ほくろ」という意味は載っていない。原文では、「志」が「瘰」(時には諸侯として取り立てられるような瘰がある)として使われているが、「志」の使い方は仮借であり、「瘰」字の通假字である。そのため、「ホクロ」という意味を説明するほか、「志」同「瘰」という情報も左ルビによつて読者に伝えていると思われる。

## 二字漢語における左ルビ

「徂徠点」における二字漢語の左ルビは、以下の〔例十〕〔例十一〕の如く、「訓訳」のようになっている。ただし、『南齊書』『梁書』における左ルビは、漢籍の注釈に由来するものがある。

〔例九〕億兆夷人

『南齊書』紀卷一・二十九裏

〔例十〕蟬日逐除

『南齊書』列伝三十八・五表

〔例九〕は『南齊書』が『尚書』から引用したものである(「受有億兆夷人、離心離徳」)。『尚書正義』の注釈(唐の孔穎達)により、後漢の服虔、西晋の杜預が「夷人」を「未開の人・えびす・野蛮人」と解釈したが、実はここでの「夷」は「平」の意味で、「夷人」は「凡人」ということである(正義曰：昭二十四年『左傳』此文、服虔、杜預以「夷人」爲夷狄之人。即如彼言、惟云「億兆夷人」、則受享其旅若林、即曾無華夏人矣。故傳訓「夷」爲平、平人爲凡人、言其智慮齊、識見同)。

〔例十〕の「逐除」は、「追儺」、「疫病の鬼神を追い払う儀式」である。『呂氏春秋・季冬』では「追儺」のみに言及しているが、後漢の高誘の注により、「追儺」のようなことは「逐除」と謂わ

れている（『呂氏春秋・季冬』「命有司大雩勞瘳、出土牛、以送寒氣」漢高誘注：今人臘歲前一日、擊鼓驅疫、謂之逐除是也）。『例九』の「ツチノタミ」、『例十』の「ヲニヤラヒ」の用例から見れば、ここでの左ルビは恐らく右述の注釈を参照して記されたと思われる。

#### 四、『南齊書』『梁書』における左ルビからみる徂徠の言語観

三節までにおいて、『六論衍義』の場合と比較したことによって、『南齊書』『梁書』における左ルビの様子を窺えた。このような左ルビには、徂徠自らが考えて創った、言い換えれば彼が持つ中国語の俗語の知識に任せて訳されるもののほか、中国古典の注釈書を参照している痕跡も見られる。つまり、左側の解釈は注釈に左右されるという特徴を持っているといえる。ただし、徂徠の言語思想には、訓詁否定に伴い、注釈否定という側面があることを説いている指摘もある。村上（一九八〇）は次のように論じている<sup>16</sup>。

徂徠においては、注を頼りにせず、自らその解釈を創造するということでもあったのである。それ故、注釈の解釈を前提にしてきた和訓を定める作業は、このような意味でも否定されその字にふさわしい和訓を自ら考案すべきであるという方向に向かってゆくことになるのである。

右のような徂徠の注釈否定は彼の言語思想においては一貫していない。村上（一九八〇）はさらに「第一期においてもまた第二期においても朱子の影響の下にあつた徂徠がそれを完全に脱するのは第三期になってからのことである」と述べている<sup>17</sup>。ここで言う第一、二期などは村上（一九八〇）が徂徠の生涯にもとづいて分けた時期区分である。そして、第一期は、元禄から宝永にかけて、第二は、宝永から正徳、第三は享保という分け方である<sup>18</sup>。要するに、村上（一九八〇）によれば、第二期までには、徂徠は注釈を完全に廃棄しなかつた。しかし、ここで注意すべきは、このような徂徠における注釈に対する否定、廃棄の対象は、主に中国の宋代以降の朱子学によつた新注である。村上（一九八〇）において、

注釈の否定によつてもたらされたことでおおきな意味をもつのは新注の廃棄ということである。その歴史は古注学にくらべ決して長いとは言えないけれども、新注学はあまねく浸透してきたようにおもわれる。訓詁においてもいろいろなスタイルをとつたけれども本は一つであるといつてよい。とりわけ近世に入つてからはその他の流派もあつたが新注学を基礎にして発展してきたといつてもよいのである<sup>19</sup>。

と述べられているように、時代背景として当時の訓詁界では、朱子学の新注による訓詁は一種の風潮になっていた。このような背景の下、後に反朱学を標榜した徂徠も、「既に見たように「示蒙」は朱子の影響が歴然としている」という村上（一九八〇）の指摘の如く、第二期までは彼の訓詁観に新注の影響はまだ残されていた。

<sup>16</sup> 村上（一九八〇）、三三三頁。

<sup>17</sup> 前掲論文、三三三頁。

<sup>18</sup> 前掲論文、三三六頁を参照。

<sup>19</sup> 前掲論文、三三三頁。



一方、本稿三節の考察によると、例えば「例四」の「銅」字について、『広韻』によったとした。この『広韻』の注は、中国の唐代の顔師古が『漢書』における「元康四年、到會孫銅陽公乘咸詔復家」の「銅」字を「銅、音紂」と注したことに由来したという<sup>14</sup>。「例九」の「夷人」の「左訓」について徂徠も、唐代の孔穎達が『尚書正義』で記している注釈を参照したことが確認できた。要するに、村上（一九八〇）が挙げている徂徠の漢語文典のみならず、彼の訓読の実態も取り入れて考えれば、古文辞学の提出の前夜、つまり第二期までに徂徠の訓読観には、新注のほか、宋代以前の漢文献によつた古注の影響も残されていた。

次に、本稿の冒頭に述べた通り、徂徠は『南齊書』『梁書』を加点了際、「東西」（『南齊書』）、「透水」（『梁書』）のようなものが、実は俗語であることを指摘している。『六論衍義』の加点点作業も、「周知のように最初室鳩巢がその訓読に従事したが俗語解釈に十分でなく、老中を介して徂徠に持ちこまれてきたわけである」と指摘されている<sup>15</sup>。ただし、同じ「俗語」と言つても、『南齊書』のような史書の場合と『六論衍義』を同一視することはできない。中国語学の分野では、俗語と関連する白話研究をまとめて紹介しているものとして張（二〇一七）がある。張（二〇一七）によると、白話は中国語の文言の対立概念であり、口語に近い文章語と定義しているが、ここでは白話を四期に分けている<sup>16</sup>。そして、本稿が取り扱った『南齊書』と『梁書』は第一期、『六論衍義』は第二期に当てはまる。張（二〇一七）は第一期の性格について、以下のように説いている<sup>17</sup>。

第一期の白話は文言の表現の中に点在しているものとする。この時期は現存する最も古い文字文献が発生してから南北朝、隋代以前までの時代に区分することができる（下略）。

続いて第二期（唐から宋・元まで）白話が文言の系統から徐々に独立し、第二期の隆盛期を迎えることになる。そして、

第二期の白話は明・清白話小説がその代表例である。これらの完成と流行は中国文学史で最も絢爛たる時代を創り出した。（中略）そららの白話小説は日本近世漢語史上の口語受容の新時代の幕を開いた上で、日本文学の発展にも多大な影響を与えた。

と述べられているように、『六論衍義』のような完全に俗語（白話）で書かれた明・清代のものと同じ、『南齊書』『梁書』のような隋代以前に成書された史書は、当時の俗語がまだ文言系統から独立していなかったため、俗語があつたとしても、「文言の海に隠されている」<sup>18</sup>ようなのである。本稿の調査でも、『南齊書』『梁書』における左ルビの用例数も『六論衍義』より少ない。従つて、前述の徂徠の指摘は、ただ『南齊書』のような史書に中国の俗語が存在する、ということ述べているのではなく、当時の日本人が「東西」、「透水」のような語を非俗語として受容したことを批判して

<sup>14</sup> 漢口（一九九四）、二七〇頁。

<sup>15</sup> 平石（一九八四）、一三三頁。

<sup>16</sup> 張（二〇一七）、一九頁。

<sup>17</sup> 前掲書、一九頁。

<sup>18</sup> 前掲書、一五頁。

いると思われる。ただし、『南齊書』『梁書』において「透水」（水の中に飛び込む）は「透<sup>ト</sup>水」とされ、「東西」はすべて無訓である。これに対して、本稿冒頭に紹介した『詠文箋語』の用例（「好<sup>ト</sup>東西<sup>ト</sup>ナドナリ」）にある「東西」は「品物」という意味で使用される「東西」であり、「モノ」という「訓訳」のようなものが左側に振られている。『南齊書』『梁書』では、すでに非俗語として受容された漢語を無訓にしていることによれば、その理由はまだ不明であるが、徂徠の訓読観にある妥協が窺われる。『南齊書』『梁書』にある「徂徠点」の左ルビは、ひたすらに俗語を左側で訳すのではなく、場合によつて訓をつけない、あるいは漢籍の注釈を参照したりすることもある。これもまた、徂徠が『六論衍義』において自身の中国語の俗語の知識に任せたりして訳すという「訓訳」と異なっていると考える。

## 五、まとめ

本稿では、先行研究を踏まえながら、荻生徂徠の「徂徠点」、すなわち彼の手によつた訓点資料を取り上げ、『南齊書』『梁書』を中心として、すなわち漢字語の左側にある振りがな（左ルビ）をめぐつて『六論衍義』と対照して考察を行った。その結果は、次のようにまとめられる。

百余りの用例がある『六論衍義』より、『南齊書』『梁書』における左ルビは少ない。その内、一字漢語の左ルビは、『六論衍義』にあるものと違い、「訓訳」のように訳を示すことや、訓読みを提示することのほか、音読みを示すために付けられることが注目される。

一方、二字漢語の場合は、音読みを示す用例がなく、「訓訳」のようになっている。ただし、『六論衍義』と違い、『南齊書』『梁書』の場合では、漢字語が俗語とされても、その漢字語に左ルビが振られていない、また無訓のことが見られる。

このような考察結果によつて、古文辞学を提出したという時期以前、徂徠の言語観には、一方的に新注によつたもののみならず、古注からの影響も存在したことがわかった。また、『南齊書』『梁書』にある「徂徠点」の左ルビは、ひたすらに俗語を左側で訳すのではなく、場合によつて訓をつけない、あるいは漢籍の注釈を参照したりすることもある。徂徠が『南齊書』『梁書』において一部の漢語は俗語であると意識しても、すでに非俗語として受容された隋代以前の俗語はそのままにしている。『南齊書』『梁書』における「左訓」の使い方も、徂徠が『六論衍義』において自身の中国語の俗語の知識に任せたりして訳すという「訓訳」と異なっている。つまり、『南齊書』『梁書』における左ルビは、「訓訳」と同一視することはできないと思われる。

## 調査資料と参考文献

### 荻生徂徠の訓点資料

- 『南齊書』、元禄十六（一七〇二）年（長澤規矩也編（一九七〇）『和刻本正史・南齊書』汲古書院）
- 『梁書』、宝永三（一七〇六）年（長澤規矩也編（一九七〇）『和刻本正史・梁書』汲古書院）
- 『六論衍義』、享保六（一七二二）年（沖縄県立図書館・貴重資料デジタル書庫）

### 荻生徂徠に関する漢語文庫

- 『詠文箋語初編』（戸川芳郎・神田信夫編（一九七四）『荻生徂徠全集・二』みすず書房）

『訓訳系纂』（戸川芳郎・神田信夫編（一九七四）『荻生徂徠全集・二』みすず書房）

## 参考文献

- 石崎又造（一九六七）『近世日本における支那俗語文字史』清水弘文堂書房
- 川島優子（二〇一四）「白話小説はどう読まれたか」中村春作編『訓読から見たおもしろ東アジア』東京大学出版会
- 京極興一（一九八一）「振り仮名表記の現状と研究」『信州大学教育学部紀要44』信州大学教育学部
- 齋藤文俊（二〇一一）『漢文訓読と近代日本語の形成』勉誠出版
- 澤井隆二ほか訳注（二〇一六）『徂徠集 序類上』平凡社
- 進藤咲子（一九八二）「ふりがなの機能と変遷」『講座日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院
- 進藤咲子（一九六八）「明治初期の振り仮名」『近代語研究2』武蔵野書院
- 張海燕（二〇一七）『古今奇談英草紙』と白話語彙』勉誠出版
- 戸川芳郎・神田信夫編（一九七四）『荻生徂徠全集・二』みすず書房
- 中村春作（二〇〇八）「『訓読』の思想史―文化の翻訳の課題として―」中村春作ほか編『「訓読」論―東アジア漢文世界と日本語―』勉誠出版
- 中村幸彦（一九六八）「翻訳・注釈・翻案」『中国文化叢書9 日本漢学』大修館書店
- 中田祝夫（一九七九）『古點本の國語學的研究』勉誠社
- 濱口富士雄（一九九四）『清代考輿學の思想史的研究』国書刊行会
- 平石直昭（一九八四）『荻生徂徠年譜考』平凡社
- 村上雅孝（一九八〇）「荻生徂徠の訓読観」『共立女子大学学部紀要』二六、共立女子大学
- 村上雅孝（二〇〇五）『近世漢字文化と日本語』おうふう
- 村上雅孝（二〇一四）「訓訳と沢田一齋」『国語学研究・第五十三集』、東北大学大学院文学研究科
- 村上雅孝（二〇一五）「岡白駒と訓訳」『国語学研究・第五十四集』、東北大学大学院文学研究科
- 村上雅孝（二〇一七）「訓訳いわゆる左ルビをめぐって」『日本近代語研究6』ひつじ書房
- 吉川幸次郎（一九七九）『漢語文典叢書・第一巻』汲古書院
- 李長波（二〇〇六）「近世、近代における「了」的の文体史的考察」『アエナシス10』アエナシス編集委員会

